

シスター・ザビエ

からの手紙

稲場日出子

昨年九月、私は一通の速達を受けとった。封筒の裏には、幼きイエス会（旧サンモール修道会）雙葉学園文書室 シスター・フランシス・ザビエと書かれていた。雙葉学園は東京の少女たちが「四谷の雙葉」とあこがれを込めてそう呼ぶ歴史の古いカトリックの名門校である。その雙葉学園のシスターからのお手紙。どうしてかしら、と不思議に思いながら封を切ると、便箋二枚に大急ぎで書かれたらしい文章が繊細な字で綴られていた。

その数日前、私は六月に発行された下水文化叢書 鳥海たへ子著『遺稿・霧の中から』祖父バルトンを思う、遺歌集・強き糸』一冊と、その本の30ページに収められた天使の絵の実物大のコピー、そして同じページの写真を含む雙葉学園に関係のありそう

な数枚の写真の複製を、雙葉学園事務局の高田さんという方宛にお送りしていた。バルトンの孫である鳥海たへ子さんが、母、多満さんから聞いたバルトンの思い出などについて書き残されたノートや、生前おりにふれて詠み溜めておられた短歌を編集し出版されたのがこの叢書である。バルトンの愛嬢多満さんが雙葉学園の卒業生であることがわかったので知人の高田さんに知らせたところ、ぜひ本を見たいということであった。たへ子さんの長女、鳥海幸子さんにこのことを話すと、幸子さんは「祖母は年をとってからも、寄宿舎でシスターたちと過ごした日々をなつかしがっていたと聞いています。」と、たへ子さんと二人ですっと大切に保存してこられた古い美しい写真を何枚も貸して下さった。その写真を了解を得て友人の写真館で複製してもらった。「霧の中から」25、27ページには、明治時代、異国情緒あふれる築地明石町の外国人居留地にあったという女子修道会の学園の当時の雰囲気がよく出ているのでそのページには付箋を付けておいた。郵便をうけ



シスターからの手紙

とった高田さんがその資料の重要さに驚いて、文書室のシスター・フランソワ・ザビエに届け、シスター・ザビエはすぐに手紙を下さったという事情のようであった。手紙には驚きと感動があふれていた。

サンモール修道会と雙葉学園では、姉妹校の田園調布雙葉学園のシスター・トマという方を中心に、戦災などで焼失した明治時代の写真や資料を探しておられるところであったという。百年以上も前のことであり、なかなか見つからず、昔の卒業生の方から届けられた古い写真なども複製にするとただ薄茶色にぼやけるばかりで、がっかりなさっていたらしい。そこへ当時のシスター方や在校生の姿が、大きくはっきりと写った数枚の写真や、遠い日の学園の様子がいきいきと書かれた本が届いたので大変感激されたようで、「修道会にとっても学園にとっても宝物を贈られたような気がしています。」と書いてあった。私は、思いがけない手紙に胸がドキドキして、その手紙を何度も何度も読み返した。

二、三日して、シスター・ザビエから電話があっ



メール・ヤン・テレーズ（左）

た。シスター・ザビエは、日本の方で雙葉学園の卒業生でもあり、音楽を教えておられるという。いろいろとお話したあとで、写真をまとめて複製して送ってほしいとの依頼を受けた。サンモール修道会や学園関係者などから「ぜひ」という熱心な声が寄せられているということであった。

さて、その中の一枚であるこの写真は、鳥海幸子さんが「霧の中から」のために描いて下さった挿絵「サンモール会修道女」（26ページ）のもとになった写真である。この写真の裏には黒いペンで「雙葉校長様」と記されている。シスター・ザビエによると、この左側の方はメール・ヤン・テレーズというお名前で、明治の初めにフランスから日本の女子教育のためにと渡ってこられ、雙葉学園を開かれた方であるという。厳しさの中にもユーモアをたたえたメール・ヤン・テレーズの、百年以上も昔の写真を見ていると、時を超えて存在するということが確かにあるように思えてくる。また、30ページに掲載されているT・バルトンのサインのある天使の絵は、

ジョシュア・レイノルズという十八世紀英国の肖像画家の習作『天使の頭部』がもとになっていることがわかった。明治時代の居留地の女学校で、スコットランド人やフランス人のシスターに教わりながら天使の絵の習作のデッサンをしている多満さんの可憐な姿が目には浮かぶ。

鳥海さんのお宅には多満さんの絵が何点か残されている、と以前に幸子さんからうかがったことがある。幸子さんは、京都の上賀茂で音楽教室を主宰されているが、東方会（川端龍子の系統）所属の日本画家でもあり、毎年大作を東京都美術館などに出版しておられる。曾祖父であるバルトンの姉妹の一人が画家であったということを思い起こすと、スコットランドと日本に別れ別れになっているのも、時と空間を超えて確かにつながっている才能というものの神秘を感じる。そしてこの本の挿絵が、その内容にどれほどふさわしいものであるかよく納得できる。

その後もシスター・ザビエから、写真複製の代金や心のこもった贈物に添えて、何度も手紙や美しい

カードが届いた。（その手紙の往復の中で、シスター・ザビエが、私達が二年前まで住んでいた新宿区戸山の官舎のお隣のご一家、国立病院医療センター松枝先生の坊っちゃん、玄くんのピアノの先生だったことがわかり二人して大よろこびしてしまった。シスター・ザビエも私も、元気でかわいい玄くんが大好きだったのである。）

また、サンモール修道会の日本管区長をなさっている、シスター・マリ・ジョゼフからも丁寧なお礼状をいただいた。管区長さまという厳かな存在でいらっしゃるに違いない方が「お写真と本の中の文章に大層興奮いたしております。見えない糸でつながれていた者同士が見える糸で出会いをいただいた感じがします。」と感動を述べられ、また「資料は日本管区の歴史に加えさせていただきます、パリの本部の文書室にも連絡いたします。」と書かれていることにこの本や写真の貴重さをあらためて知り、一冊の本になってほんとうによかったと思わずにはいられなかった。

シスターからの手紙は、お預かりした贈物とともに鳥海幸子さんにお届けした。「お写真をこんなによく保存しておいて下さって」とシスター・ザビエが感激なさっていましたよ。」とお伝えすると、幸子さんは「祖母も母もどんなによろこんでいるでしょう。」と涙ぐまれ、結婚後、京都で暮らしておられた多満さんが、河原町三条のカトリック教会のところで、東京から来ておられたサンモール修道会のシスターに偶然出会われて、あまりのなつかしさに手を取り合ってお話をなさったことや、たへ子さんの願いによって、多満さんとたへ子さんが京都の衣笠にあるカトリックの墓地で、ご一緒に眠っておられることなどを、しみじみと話して下さった。そして「母は、自分の書いたノートや歌をいい本にまとめていただいて、ほんとうにうれしかったんだと思うんです。」と不思議な話を始められた。

『霧の中から』には幸子さんの情感あふれる随筆が「あとがき」として添えられているが、その中で幸子さんは「いつまでも寒いわねえ。」というたへ

子さんの声を聞いたような気がする」と書いておられる。幸子さんがその原稿を書き終え、届けて下さってから半月ほど過ぎた四月八日の午後のことである。音楽教室の生徒さんの一人、小堀嘉子ちゃんがレッスンにやってきた。嘉子ちゃんは、いつものように二階のピアノのお部屋に入ってくると、「先生、いまお客さん来てはったでしょう。」と尋ねた。幸子さんは不思議に思いながら「いいえ、お客さん来て誰も来てはらへんよ。」と答えた。すると嘉子ちゃんは「いま玄関のところで、髪の毛がまっ白で、ピンクのワンピース着た人とすれちがったけど。」と不審そうに言う。「そう、おかしいね、誰かしら。」やがてレッスンを終えて嘉子ちゃんは帰っていったが、すぐに嘉子ちゃんのお母さんから電話がかかってきた。「先生、嘉子が会った人、おばあちゃん先生と違うでしょうか。」

嘉子ちゃんのお姉さんの真由子さんは、以前たへ子さんにピアノを習っていたので、嘉子ちゃんのお母さんはたへ子さんをよくご存じである。おばあちゃん

ん先生というのはたへ子さんのことである。

「ほんとに母かもしれません。母は若いころピンクの服が好きで、ピンクのブラウスやらワンピースやらよく着てたらしいですよ。」

きつとよく似合われたでしょうけれど、でも、そんなことってあるのかしら、あるかもしれない、あるといいなあ……と私は心の中で思っていた。

「それに、」と幸子さんは微笑みながら言われた。

「四月九日は母の命日ですしね。」

そのピンクのワンピースの白髪の女の方がどなたであつたのか、誰にもわからないままである。

